

Title	ジェントルマンになりたかった男 : Eugene O'NeillのA touch of the poetにみる「不気味なもの」
Sub Title	The Man who would be gentleman : "the uncanny" in A touch of the poet
Author	清水, 純子 (Shimizu, Junko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2008
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 英語英米文学 No.53 (2008.) ,p.75- 108
JaLC DOI	
Abstract	A touch of the poet is one of the striking tragicomedies of Eugene O'Neill. Through A touch of the poet, O'Neill proves that he can not only write good tragedy but also excellent drama, which comically tasteful. The setting of A touch of the poet is from the morning till midnight of 27 July, 1828, in a forlorn tavern in the suburbs of Boston. Middle-aged Cornelius Melody is an immigrant from Ireland where he believes to have been a "gentleman". Although Melody is now degraded to a drunken owner of the dirty, cheap tavern, and actually supported by his hardworking wife and daughter, he refuses to realize his true self and narcissistically praises his manly, handsome self-image reflected in the mirror. However, Melody's illusion of "being a gentleman" is shattered by the severe antagonism of the rich Harfords, of which his beautiful daughter, Sara, is going to be a member. Sara falls in love with Simon Harford, who is an heir to the rich Harford family. "The uncanny" in Melody is "the repetition of the same thing", his recurrent illusion or self-deception of being a "gentleman". "Being a gentleman" is not uncanny, but what is uncanny is the difference between his present state as a shabby drunkard and his illusory past as a glorious, gallant gentleman. What is uncanny is elody's obsession with the past and his present state of being obsessed by the illusion of "being a gentleman". When the symbol of Melody's glorious past and male vanity, the beautiful English military uniform, is torn by Harford's subordinate men, Melody ultimately realizes that he was possessed of the past glory, void pride and illusion. Melody painfully learns that even in the

	U.S.A., a man without money or social status is not respected as a "gentleman". Deprived of all his pride, Melody is forced to recognize his poor social and financial status; however, instead of abandoning his aristocratic bravado, Melody is freed from the affectation of aristocracy and heroism and reveals his true self, that is, his easy bum nature. Despite Melody's sudden transformation in character, his faithful wife, Nora, proudly says, "I'll play any game he likes and give him love in it. Haven't I always? (She smiles.) Sure, I have no pride at all—except that". Eugene O'Neill depicts the foolishly old-fashioned dreamer, Cornelius Melody, with irony, humor and pathos.
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20080930-0075

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ジェントルマンになりたかった男： Eugene O'Neill の *A Touch of the Poet* にみる 「不気味なもの」

清 水 純 子

はじめに

A Touch of the Poet (『詩人氣質』1939-42 執筆、初演 1957) は、Eugene O'Neill の傑出した悲喜劇である。O'Neill は悲観的な色彩を持つ、すぐれた戯曲を数多く世に送りだしてきたが、*A Touch of the Poet* において、コミカルな要素を備えた戯曲を描くことにおいても同様に、たぐいまれな才能を持っていることを証明してみせた。

舞台の時代背景は、1828 年 7 月 27 日の朝から真夜中まで、場所はボストンから数マイル離れた古い、さびれた安酒場に設定されている。居酒屋の主人 Cornelius Melody (コーネリウス・メロディー) は 40 歳代半ばであり、アイルランド出身のアメリカ移民第一世代に属し、以前は美しかった妻の Nora (ノラ) と 20 歳の黒髪の美人の娘 Sara (サラ) と共に、流行らない酒場を経営している。客観的にみれば、現在の Melody は妻と娘を女中兼ウェイトレスとして酷使して働かせ、自分は売り物の酒を浴びるように飲んで、店の利益を損ない、一家の貧困の元凶になっている、体たらくの飲んだくれでしかない。しかし、Melody は、祖国のアイルランドで、ジェントルマン階級として生まれ、育ち、英国軍の少佐として、ナポレオンの軍隊と戦って、武勇をたたえられた輝かしい過去を持つ、と信じて生きてきた。もはや過去の栄光でしかない、肥大化した幻想に基づくブ

ライドと見栄を生きる支えにしている Melody は、現実の自分の姿を見ることを拒否し、娘の Sara の批判を無視して、周りの迷惑を顧みず、時代錯誤の、ひとりよがりの、はた迷惑な紳士きどりと傲慢不遜な態度を崩すことはない。

ジェントルマンであることを誇示する Melody の滑稽なうぬぼれと虚栄心を象徴する道具として O'Neill が観客の視線をとらえるために用意している舞台用の道具は、舞台上に設置された Melody 専用の「うぬぼれ鏡」、Melody が愛唱する Byron の詩「チャイルド・ハロルド」、妻と娘以上に大切に飼いならし、かっこよさをひけらかすために始終またがっている「サラブレッドの雌馬」、そして普段は屋根裏部屋のトランクにしまっているが、タラヴェラの記念日（舞台上演当日に設定されている）にはブラシをかけて、男前をみせびらかすために着込む、緋色の「英国軍の軍服」である。これらの道具はすべて、ジェントルマン階級に生まれ育ったと自負する Melody の階級、ジェンダー、エスニシティーと関連づけることができる。「紳士であること」は、Melody の自負と自惚れの根源であるばかりでなく、Melody が他の男を評価する時の基準である。ジェントルマンである男性、あるいはレディーである女性だけが、Melody の同類であり、尊敬しあって対等につきあえる相手なのである。したがって、ジェントルマンの対極にあるとされる、小作人、田舎者、無学な労働者は、Melody が忌み嫌う、軽蔑の対象である。現在の Melody は、田舎のうらぶれた酒場の、のんだくれ親父になりさがっているのも、Melody 自身が嫌悪するジェントルマンの対極にある存在にまで没落した状態にある。しかし、それだからこそ、Melody は周囲の人間と自分との違いを際立たせるために、自分が生まれながらのジェントルマンであるという幻想と、半島戦争で手柄をたてた少佐であった過去とにしがみつくと必要があると考えられる。

Melody の過去において「ジェントルマンであった」、あるいは現在も「ジェントルマンである」という妄想と錯覚の「同じ事態の反復」（フロ

イト 249) が、*A Touch of the Poet* における「不気味なもの」だと言える。「ジェントルマンである」ということそれ自体は立派なことであり、「不気味なこと」ではない。しかし、没落した田舎の飲んだくれの酒場の主 Melody が、現実を見ようとせず、いつまでも実体のない「ジェントルマン幻想」に取りつかれている、しかもその「ジェントルマン幻想」は、アルコールが入ると極点に達するという点が哀れであると同時に「不気味なもの」と観客の目には映るはずである。ちょうど、*Long Day's Journey into Night* の Mary が、麻薬の力を借りて、真夜中の到来と共に「過去をさまよう亡霊」となって観客の前に姿を表した時と同様の劇的効果を、Melody の「ジェントルマン幻想」は持っている。アルコールによって現在と過去、現実と幻想の境界線の敷居を越境した Melody は、過去をさまよう亡霊に変身して、Melody 少佐としての過去の栄光にひたる。この時、Melody の「心の無意識の中の（中略）欲動の蠢きから発生する反復強迫の支配を認める」（フロイト 251）ものである「ジェントルマン幻想」は、Melody の「心の生活の特定の側面に魔的（デモーニッシュ）な性格を帯びさせるもの」（フロイト 251）として、Melody のナルシズムを他の舞台登場人物と観客に向かって露出させるのである。もっと具体的に言うならば、「ジェントルマンである Melody」とは、希望のない現実から逃避し、「死の力を断固否認すること」（フロイト 248）を可能にする「ドッペルゲンガー現象」の一種である。Melody は「ジェントルマンである」という架空の幻想としての自画像、つまりドッペルゲンガーの自画像、を描いてみせることによって「原初的ナルシズム」の没落を防止し、自己の「破壊から身を守るため（中略）の複製を創り出す行為としての」「夢言語」（フロイト 248）としての「ジェントルマン幻想」に浸るのである。Melody は、「ジェントルマンである」という幻想に身をゆだねることによって、「無制限の自己愛」（フロイト 248）を獲得し、つらい現実を忘れて、過去の夢に生きることが可能になる。Melody の心が「ジェントルマン幻想」によって、「自我の没落」を免れたことによって、その肉体も生

を継続することが可能になる。したがって、希望のない現実にも身を置く Melody にとって「ジェントルマンである」という幻想は、精神と肉体の死を回避し、生の継続を保証し、可能ならしめる、「破壊から身を守るための複製を作り出す行為」（フロイト 248）としての必要不可欠な夢想である、ということができる。

ジェントルマンとは何か

劇中、50 回弱に及んで連発されている「ジェントルマン」とはそもそも何であろうか。「ジェントルマン」はどのように定義できるのだろうか。*The Oxford English Dictionary* 2nd ed. は「ジェントルマン」“gentleman”を以下のように定義している。

- (1). A man of gentle birth, or having the same heraldic status as those of gentle birth; properly, one who is entitled to bear arms, though not ranking among the nobility, but also applied to a person of distinction without precise definition of rank. 高貴な（ジェントルな）生まれであるか、あるいは高貴な生まれを示す紋章をもつ男性。とりわけ、高貴さの序列には関係なく、紋章を持つことを許された者。
- (2). A Man of gentle birth attached to the household of the sovereign or other person of high rank; 王家あるいは高い位の家庭に仕える高貴な生まれの男性
- (3). A Man in whom gentle birth is accompanied by appropriate qualities and behavior; hence, in general, a man of chivalrous instincts and fine feelings. 高貴な生まれにふさわしい特質と行動を備えた男性；したがって生まれながらの騎士道的精神とりっぱな感情を持つ男性。
- (4). A man of superior position in society, or having the habits of life indicative of this; often, one whose means enable him to live in easy

circumstances without engaging in trade, a man of money and leisure. 社会的上位の地位にある男性、あるいは社会的優越を示す生活習慣を有する男性。たいていの場合、職業を持たなくても生きていけるような安楽な立場にあることが多く、金と余暇を持つ男性。

OED と呼ばれる上記の辞典は、英語の文献に現れた語彙の歴史的記述に特徴があり、それぞれの語の形とその変化・語源・文献初出年代・文献上の用例の列挙・厳密な語義区分とその変化に関する包括的記述であるために、古典的使用法を含んでいる。O'Neill の Melody 少佐は、時代遅れの回顧趣味の男性であり、アメリカに移住した後も、本国イギリスとアイルランドに対する愛憎のアンビヴァレンスを断ち切れずに、過去の幻影を引きずって生きているのだから、OED の “gentleman” 「ジェントルマン」の定義がふさわしい男である。Melody が意味するところの「ジェントルマン」は、(2) の良家に仕える高貴な男性という意味を除いた (1), (3), (4) の定義であろう。「ジェントルマン」という概念自体が貴族のようなはっきりした社会的身分を表していないので、Melody がアイルランドの少佐であった過去において「ジェントルマン」であったかどうかは、主観的認識の問題であろうが、少なくとも安酒場のアルコール中毒の主におさまっている現在においては、社会的地位、行動様式、見かけ上の精神的高貴さの点で、「ジェントルマン」と呼べない状態であることに疑いの余地はない。

山本正は「ジェントルマン」について以下のように述べている。

そもそも、近代のジェントルマンは法的身分ではなく、社会的地位である。みずからがジェントルマンと称するだけでは不十分であり、社会的にジェントルマンと認められて、はじめて意味がある。では、そのための条件は何だったか。そもそもジェントルマンという呼称は、「高貴な人」 *gentilis homo* に由来する。「高貴」には、古来、由緒正

しさと家柄のよさといった意味がある。ジェントルマンも、もとは由緒正しき家柄のよさをもって他と区別される人びとであり、これを社会的に証明するのが「紋章」であった。本来、紋章は、勝手につくって自由にもてるというのではなく、「紋章院」への登録、認可を必要とした。もっとも、「紋章」は近代には売買の対象となるので、成り上がりでも「紋章」を購入して、ジェントルマンを称することができる。こうして、家柄のよさなどというものがかなりあやしくなると、むしろ、教養や品性の高さといった個人的資質が高貴さのしるしとして重視されるようになっていった。

しかし、家柄のよさにしろ、教養・品性の高さにしろ、こうした「高貴さ」を獲得・維持するために必要な物質的条件があった。不労所得で生活でき、かつ、いささか同語反復的であるがジェントルマンにふさわしい生活をおくれる、すなわち、ぜいたくな家具調度品を備えた広大な邸宅に住み、大勢の奉公人を抱え、御者つきの馬車で移動し、華やかな社交を繰り上げるといった、つまるところ衛示的消費を行いうることである。本来こうした生活ができたのは、広大な所領を有して、そこからの相当の地代が入る地主しかいなかった。そして、のちに金融制度が発展すると、有価証券が生み出す利子収入でやっていける豊かな証券保有者が、これに加わるのである。

ただし、近代イギリス社会では、働いても高貴さを失わないとみなされた職種もあった。これがジェントルマン的職業 *gentlemanly occupations* である。ただし、これは時代によって変化し、あるいはその範疇が拡大していく。当初は聖職者や法律家、内科医といったところだが、その典型的職種であったが、やがて、相互に密接に関連する帝国の拡大と国家諸制度の整備・充実に伴って、貿易商や高級文官・武官などもジェントルマン的職業とみなされるようになっていった。これはジェントルマン的価値観がヘゲモニックであり続けた近代イギリス社会において、ジェントルマンになる／でありつづける機会

が一層増えていったことを意味し、過大評価すべきではないが社会的流動性を高め、ひいては政治・社会体制の安定につながった。また、貿易の機会や高級文官・武官のポストの増大を求める社会的圧力が、国家諸制度の整備・充実や帝国の拡大を一層促していったという側面もあった。(中略) ジェントルマンとは、まさしく「ジェントルマン」としか表現のしようのない近代イギリスの支配層なのである。

(山本正 9-10)

山本正は、英国における「ジェントルマン」の不完全な身分概念とその価値体系の変遷を客観的に総括して述べている。山本の説明からわかることは、第一に「ジェントルマン」が、はじめから漠然とした、くっきりした境界線を引けない、あいまいな階級概念であったということ、第二に時代とともに「ジェントルマン」の名に値する男性が下の階級へと広がっていき、その概念は抽象化され、その持つ意味も拡大していったゆえに、「ジェントルマン」が漠然とした、つかみどころのない一般的理念になった、ということである。Peter Joseph Cain (ピーター・ジョセフ・ケイン) と Antony Gerald Hopkins (アントニー・ジェラルド・ホプキンズ) は、*British Imperialism: Innovation and Expansion 1688-1914* (『ジェントルマン資本主義の帝国』) において、以下のようにジェントルマンを定義する。

ジェントルマンは生まれによるものであると同時につくられたものでもある。高貴な生まれであることは比類のない優位性であり、時の輝きを担っていたが、ジェントルマンの地位は、振り出しに戻って手に入れなければならないものでもあった。それゆえ、英国紳士の歴史は、社会的緊張を伴って、絶えまない進化にさらされてきたものの一つであった。つまり、年月という輝きを持つ既存の地位にある者が、時期の到来を虎視眈々と狙っていた新参者の挑戦を常に受けてきた。た

とえ、かすかに、ゆっくりであっても、ジェントルマンの地位についての定義が常に変化してきたことが、ジェントルマンの地位についての歴史的概観を述べることの困難さを疑いもなく示している。しかし、ジェントルマンという言葉の意味の変遷は、長年にわたるイギリス社会の歴史の揺れ動く輪郭を描くことを可能にする、一つの道を提供してくれる。

しかし、その理想的な形におけるジェントルマンの主たる資質においては、チョーサーからウォーにいたるまで、動かない参照基準点がみとめられた。完璧なジェントルマンは、自己の栄達よりも義務の遂行に価値を置くことを名誉の行動規範として心得ていた。ジェントルマンの行動規範は、気風において封建領主的であると同時にキリスト教徒的であった。(Cain & Hopkins 22-23)

ジェントルマンは現実に生活していくうえで、収入を得る必要があるのに、職業を持つことを見下していた。ジェントルマンの収入源は、世俗の商業活動の世界とは一線を画した、ジェントルマンの生活信条に矛盾しない方法、つまり巧みな社交外交術と、不労所得である土地所有による地代、によってまかなわれていた。ジェントルマンの高い社会的地位は、前近代的資本主義の遺産である「財産相続による富」とそれがもたらす権力と権威によって維持される一方、商業的農業からの新しい所得を得るという、新旧2つのもの融合によって成り立っていた。ジェントルマンは個人的忠誠と家族的連帯に重きを置き、実務的態度と利潤獲得を軽蔑した。ジェントルマンが就く特権的職業領域は、「軍部の将校などの上級職、聖職者、上級公務員」などのサービス部門であった。ジェントルマンと非ジェントルマンの区別は、ジェントルマンが富を財産として継承するのに対して、非ジェントルマンは個人の努力あるいは実業によって富を獲得しなければならないことによってなされた」(Cain & Hopkins 23-28、筆者要約による邦訳、参考は竹内訳『ジェントルマン資本主義の帝国Ⅰ』18-21)、と

Cain と Hopkins は述べている。

イギリスの伝統的社会構造において重視されてきたのは、ジェントルマンであるか否か、という独特の社会的2階層システムである。したがって、イギリスの男性は、ジェントルマンだと認められることを人生の最大の目標、名誉、誇りとしてきた。ジェントルマンであることは、社会的成功を収めることよりも、領主や国王として君臨することよりも価値があるのだ。ジェントルマンはOEDの(3)の定義にあるように、中世の騎士道を理想としたため、戦闘力としての武力支配、由緒正しい血統を重んじ、宮廷風恋愛と高い身分の女性崇拜、プライドを守るための決闘の習慣を持った。したがって、過去の時代においてジェントルマンと呼ばれた人々は、自分の名誉を守るために警察や裁判所を利用するのを恥だと感じ、Melodyのように決闘によって身のあかしを立てることこそが名誉を守るために望ましい形態であるとして選択した。

クラス（階級）

「ジェントルマンは法的身分ではなく、社会的身分である」のだから、アイルランドの城で生まれ、ダブリンの貴族の子弟の学ぶ大学へ通い、ナポレオン戦争で手柄をたてた、美男の少佐であった輝かしい過去を持つ Cornelius Melody が、自分は紳士階級に属している、と豪語していたとしても、それを自惚れだと言いつけることはできない。たとえ Melody の父が、「泥だらけの床で豚と一緒にあってキーキー騒ぎ、取っ組み合うような」(III.243) アイルランドのどん百姓出身の吝嗇な酒場の主から、汚い手を使って金儲けをして、土地を買いしめて地主になり、貴族を装っていたにせよ、周りの人々が Melody 父子を「成り上がり者」として陰では蔑んでいたにせよ、イギリスの社会構造が産業革命によって変化しだし、それにつれてジェントルマン像も変質しだしたのだから、Melody がジェントルマンとしての誇りを、1828年のアメリカで捨てきれなかったとしても無理はない。徳を備えた、貴族に属する生まれのいい男性のみがジェン

トルマンである、とみなされた時代は 19 世紀のイギリスでは終わりつつあったので、Melody が過去において、祖国アイルランドで、ジェントルマンというあいまいな階級に属していなかったと言い切ることはできない。Melody が貴族的価値観に忠実であり、詩人氣質を大切にする夢想家であることは貴族出身の偉大な詩人 Byron の「チャイルド・ハロルド」“Childe Harold”を暗誦することを日課としていることからわかるが、Melody が自分をジェントルマンだと主張しても、成り上がり者も財力を貯え、権力を持てば紳士気取りでいられたので、真赤な嘘を言っているわけではない。Melody の父は、Melody が誕生した頃には、城主になり、資産をたくわえ、働かずに暮らしていける身分だったので、Melody はジェントルマンに必要なとされる学識と教養を身につけ、ジェントルマンの職業としてふさわしいとされる軍人になり、武勲をたてたことになっているので（第 4 幕になって、イギリス将校の赤い軍服は盗んだもので、ウェリントンの戦いで武勲は嘘だと Melody 自身が白状することになるが、Melody の言葉の真偽のほどは不明）、世間的にはジェントルマンの資格は十分あった。振り向かない女はいない色男であった Melody は、貴族の夫人に言い寄って、決闘をした結果、その夫を殺して、大スキャンダルを引き起こし、軍人の職を追われ、アメリカに移住せざるをえなくなった。

しかし、過去においては、宮廷恋愛や決闘がジェントルマンのたしなみであったことを考慮すると、Melody はジェントルマンのイメージに忠実であったと言ってよい。しかし、このジェントルマンの特性は過去における認識であり、旧世界イギリスでの、古い価値観に沿った生き方である。Melody の因習に囚われた、名誉と大義名分を第一にして、過去の栄光にすがって、厳しい現実をみようとししない姿勢は、階級的平等を前提として、苛烈な自由競争を前提とする新大陸アメリカの生き方になじまない。*A Touch of the Poet* の傑出した喜劇性も悲劇性も、Cornelius Melody という男の時代錯誤の、場所をわきまえない、お門違いの感覚と行動を軸にして組み立てられている。言い換えれば、この戯曲の悲喜劇は、旧大陸と

新大陸の間の価値観、時代的変遷による変化のギャップを乗り越えられない、不適応者の滑稽さと哀れさを指摘している。あるいは、旧世界イギリスでの過去の栄光にすがって、新世界アメリカでの価値観になじまず、プライドを捨て去ることができず、新世界向けの人生のリセットに失敗して、負け犬にならざるをえなかった、一人の男の悲喜劇を共感をもって描いたという見方が成り立つ。

イギリスとは違って、身分制において、階級のない、自由と平等の国、アメリカでは Melody が生まれながらの貴族ではなく、父親が下賤の生まれだということが原因であざ笑われる、ということはない。Melody が周囲のひんしゅくを買う、滑稽なキャラクターとして登場するのは、古い価値観にこりかたまって現実に対応できず、おちぶれた自分の姿を直視することができず、過去の「おとぎ話」にしがみついて自惚れている、その認識不足の態度ゆえである。特に娘の Sara は Melody の現状に不満を隠しきれず、批判的である。Sara の不満は、「メロディー自身が貴族の出でもないのに、民主党に反対してヤンキーの肩を持ったあげく、そのヤンキーに騙されて、ただ同然の土地を買わされ、イギリスから持ってきた財産をなくした。もしサラが男であり、メロディーの立場だったらどんな夢でもかなえてみせた」(第一幕)ということである。Melody 家の経済は、Melody が自分では働かず、ただで酒を飲んだり、飲ませたりするために、極貧へと傾いている。つけを支払うためにとっておいた金も、Melody が自惚れるために乗り回しているサラブレッドの雌馬の餌代に消えていき、借金支払い延期の命乞いも、娘の Sara がすべて一人で片づけなければならない。Sara は「雌馬が第一なのよね。あの雌馬のせいで、私たちの食べ物が無くなったって知らないってことよね。ご立派なジェントルマンがアメリカ中を駆け巡るのに、サラブレッドは不可欠ってことだわね。(中略)よくわかっているつもりよ、父さんが私たちよりも馬を気にかけていることはね」(I.191)、「父さんにはそんなことはどうでもいいのね。自分とあのきれいなサラブレッドの雌馬がかっこよく生きていられさえすれ

ばいいのだわ」(II.211)とふてくされる。Sara の不満を証明するかのよ
うに、ジェントルマンの証拠として唯一保持しているサラブレッドについ
て Melody は、「そうだ、私は馬を持っているのだ！ あの馬に、たっぷ
り食わせてやるために、私は自分が餓えてもあの馬だけは守りぬくことを
誓うぞ」(I.206)と答え、Sara は「母さんを自分の馬の世話をさせるため
に奴隷にして飼っているのね。たとえ母さんが飢え死にしてもかまわな
いのね」(I.206)と辛らつに対応する。Sara は「父さん、目を覚ましてよ。
今日はほとんど飲んでいないんでしょ。しらふに近いんでしょ。父さん
は、死んでいる嘘と、生きている現実の違いがわからないほどいかれちゃ
ったの？」(I.207)。「もし父さんが現実を直視する勇気を出したら、その
時、自分を憎み、軽蔑するでしょうね。(中略)いつも父さんが自分を鏡
に写して自惚れている時、きっといつかは、何かが、父さんの現実の姿を
写し出すでしょうよ。それこそが、父さんが母さんと私にしてきたことへ
の復讐なのよ」(III.237)と辛らつな現実認識に立ってものを言う。ジェ
ントルマンが法的身分ではなく、社会的身分であるから、その行いと精神
がジェントルマンであるかどうかの決定要因であり、ジェントルマンである
ことは、自己申告制で認められるものではなく、まわりの人々の評価によ
って認定される。この観点からみると、Sara は、父 Cornelius Melody を
本物のジェントルマンと認めず、「擬似ジェントルマン」としかみなさな
いことは明らかである。第4幕で明かされることになる、Melody のウェ
リントンでの武勲が本当にあったことなのか、Melody が告白しているよ
うに、捏造されたものなのか、その真偽が観客にはわかりかねることから、
Melody のジェントルマン気取りは、見せかけのものであり、Melody が
生きていく上で必要なプライドを守り、勇気を得るための幻想であった、
つまり Melody は「ジェントルマン幻想」に取りつかれた、現実と幻想の
間を徘徊する男、と解釈することも可能である。

娘 Sara のアメリカに同化した、現実的なものの見方に対して、母親
の Nora は、貧乏と生活苦のために、過去においては輝いていた美貌を失

い、年不相応に老け込み、奴隷のように働かされているが、夫に忠実であり、愛の力を信じ、Melody を弁護する——「(頑固に) 嘘なんかじゃありません。お父様は今でもジェントルマンでいらっしゃる。大きな土地付きのお城で生まれたのですよ。それに大学教育を受けて、ウェリントン卿の軍隊の将校だったではありませんか」(I. 192)、と常に夫を尊敬し、擁護する。「私はあの人を愛していることを誇りに思っている。あの人姿を見たその日から、愛し続けてきたし、死ぬまで愛します。(中略) 地獄の火が私たちの間にあったとしても、あの人と一緒に、喜んでその中を歩く。火で身を焼かれながら、歌を口ずさむでしょう。愛するあの人唇が私の唇に重ねられるならば。それが愛よ。私は愛することの切なさ喜びを知っていることを誇りに思うわ」(I.192-92) と Sara は Melody への愛と献身を隠さない。母 Nora のロマンチックな夫への愛情に対して、娘 Sara も敬意と尊敬を感じるが、階級上昇という点からみれば、Nora の考え方は非現実的だとはいえない。アイルランドの貧農の娘であった Nora は、きわだった美貌によって、美男で武勇の誉れ高い、城主の跡取り息子を射止めたのだから、アイルランドにおいてはシンデレラの階級上昇にたとえられる。たとえ、アメリカでの Melody が財産をなくして没落していても、アイルランド時代、Melody は Nora が手が届くような階級の男性ではなかった。Melody が時代錯誤の決闘を、Sara の恋人の父親に挑んだことを知った Nora は、心配のあまり Melody に対する恨みをもろすが(第4幕)、Melody と同世代に属する Nora は、アイルランドのジェントルマンであり、自分にとってプリンス・チャーミングであった Melody の過去の夢に忠実に従っている。愚かなまでに良妻賢母を死守する Nora だが、Melody との出身階級、受けてきた教育と教養の違いを考えれば、Nora にとって Melody は依然として、プリンス・チャーミングだから、従っているのも不思議ではない。

娘 Sara には通用しない、祖国アイルランドでのジェントルマンぶり、を支えてくれる妻 Nora の献身のおかげで、Melody は、自分の経営する

安酒場内部においてのみ、アイルランドにいた頃と同じ気分で、ジェントルマン気取りを演じることを許されている。Melody の「物腰や態度は洗練されたジェントルマンである。ジェントルマンすぎるのだ。洗練されたジェントルマンを過剰に演じているために、彼自身の中で、現実の彼よりも、演じているジェントルマンの方が現実になってしまった、という感じがする」(I.197-98) のであり、Melody は「彼の態度は謙虚である。しかし、劣った立場の人に話しかけるように」(I.198) 妻に朝の挨拶をする。「宿屋をやるまでおちぶれてしまったが、少なくとも良心的な商売をしているつもりだ。ジェントルマンの口に合うような酒しか置いていないのだから」(I.199) のであり、二日酔いを Sara にとがめられても、「ジェントルマンは好きなように飲むものなのだ。まあ、自分の酒がある場合ではあるがな」(I.204) と意に介しない。ウィスキーを飲みだすと Melody は段々傲慢な自身過剰になっていき、その顔を鏡に写して、めかしこみ、「ありがたいことに、私はまだ将校にしてジェントルマンの姿を保っているな。運命が私の魂を押しつぶそうとしても、私は死ぬまでこの姿を保ってみせるぞ」(I.202-03) と言って、「自分の人生を正当化するための誇りを呼びさますまじないを唱えるかのように」(I.203)、バイロンの『チャイルド・ハロルド』“Childe Harold”の「私は世間を愛さなかった、世間も私を愛さなかった。私は世間に媚びたことはない」(I.203) という詩文を呪いのように唱える。

Melody の男性としてのプライドが最高潮に達するのは、陛下の第七竜騎兵隊の武勲の誉れ高い Melody メロディー少佐であった過去に思いを馳せる時である。この戯曲の設定当時から 19 年前に遡る半島戦争で Melody 少佐が手柄をたてたタラベラの記念日であり、この日は「少なくともタラベラが新しいウィスキーの銘柄でないことを知っている」(II.210) 部下を従えて、過去の自分に舞い戻り、過去の栄光を満喫する時なのである。Melody のプライドを守るために、酒場のバーテンの Mickey は、この日は Melody を「少佐殿」と呼ぶことになっており、祝

いのために呼び寄せられた元部下の Cregan は、Melody から「伍長」と呼ばれ、Melody は「メロディー少佐」と呼ばれないと乾杯に応じない徹底した態度を示す (II.230-31)。

しかし、Melody のジェントルマン気取り、アイルランド時代から大切にしていたジェントルマンとしてのプライドは、トラヴェラの記念日である 1828 年 7 月 27 日の真夜中に、たった一日のうちに、粉々に碎ける。Melody のジェントルマン幻想は、幻想をかくまってくれていた Melody の支配する安酒場以外から侵入してきた外部の人間との接触によって、簡単に崩される。娘 Sara は、ヤンキーの資産家 Harford (ハーフォード) 家の Simon と相思相愛の仲であるが、Simon は病気になって Melody 家の 2 階で Sara の看病を受けていた。息子 Simon の行状を心配して訪ねてきた母親の Deborah によって、Melody のにせジェントルマンの化けの皮がはがされる。うぬぼれ鏡の前でバイロンの詩を暗誦して悦に入っていた Melody の前に突然あらわれた、41 歳には見えない美しいレディー、Deborah に、Melody は、男前を武器に往年の女たらしぶりを発揮しようとする。Melody の美貌と紳士の優雅な振る舞いに、うっとりとなってキスを許す寸前に、Melody の口から臭うウイスキーの臭い匂いに、Deborah は我にかえり、嫌悪と怒り、軽蔑を Melody に投げかける。美しい軍服姿を披露して、失地挽回をはかろうとした Melody だが、着替えている間に Deborah は帰ってしまう。Melody が過去に持っていた婦人に対する神通力は、ウイスキーのせいで失われてしまった。2 番目の大きな打撃は、Harford 家のお抱え弁護士 Nicholas Gadsby のもたらした提案である。Melody は、ヤンキーの成り上がり者として Simon をみていたが、「詩人の気質」(A Touch of the Poet) を持つ Simon 青年を高く評価していたので娘の Sara との結婚に賛成だった。弁護士の Gadsby の訪問は、Sara との結婚の正式な申し込みと支度金の額の相談のためだと自惚れていたのに、Harford 家にとって、貧乏なアイルランド系の Sara との縁組は社会的に不釣り合いなものと思われ、関係解消のためのわずかな手切れ金の申し

出と立ち退き要求だったからである。祖国アイルランドでは、ジェントルマンの階級に属していたが、没落して酒場の主になっている Melody 家は、実業家の国、アメリカでは、ジェントルマンだとみなされないことを思い知らされたのである。小さな自分の酒場に閉じこもって、従順な妻と、他に生活のあてがないので不平を言いながら従っている娘、ただ酒がめあてで、おべっかを使うアイルランド系の仲間に囲まれた Melody のジェントルマン幻想王国は、アメリカ的価値観と生き方をしているエリートのヤンキー一家の Hartford によって一笑にふされたのである。

しかし Melody の長年培われたジェントルマンとしての誇りは、これだけでは砕けなかった。予想外の侮辱に憤った Melody は、時代錯誤にも決闘を Harford 家の当主に申しこみに、大邸宅まで馬車に乗って押しかける。Melody は面会がかなわなかったばかりでなく、Harford 家の黒人のボディガードにうちのめされたあげく、自慢の美しい軍服をずたずたに引き裂かれ、その身柄は警察に留置されてしまう。留置をといてくれたものは、スキャンダルをおそれた Harford 氏が支払った金だった。

Melody は、この時点でようやく自分がジェントルマンであることがアメリカでは妄想にすぎないことを悟ったのである。Melody は自分が、「遺跡をうろつく幽霊にすぎない」(II.212) ことを自覚し、Melody は、自分の戦場の武勲の目撃者であり、過去の栄光の遺物である愛馬を射殺する。馬と心中しようとして死にきれなかった Melody は、ジェントルマンとしてのプライドを殺したことによって、先祖と同じアイルランドの貧農に戻り、別人のようになって、かつては軽蔑していた酒場の連中と対等に飲み交わすようになる。Melody はうそぶく——「少佐のやつ、物笑いの種さ。やつはサーカスの道化みたいだったじゃないか。やつが魂が地獄の火の中で安らかになりますように。(中略) 死んだ男なんかどうだっていいじゃないか。俺は現在を生きているんだ。これから皆の仲間入りをするのだ。少佐が俺を長いこと引きずってきた、孤独な犬の生活をこれから埋め合わせてみせるのだ」(IV.278)。Melody は最後に、「何であったか」

よりも「何をしてきたか」を重んじるアメリカという国の価値基準を理解するにいたり、資産を失った男は働かなければ生きてゆけないことに気がついたのである。イギリス以上にアメリカでは経済力がジェントルマンの資格であることを思い知らされた Melody は、それまでの実態のないプライドを捨て、過去との縁を切ろうと決心した。しかし、皮肉なことに、少佐 Melody、ジェントルマンの Melody、という幻想を碎かれることにより、以前の誇り高かった Melody という男の人格は崩壊したのであり、そのことに気づいた娘 Sara は泣き崩れる。

Melody が軍服を破かれ、顔を強打されたことによって、簡単にジェントルマンとしてのプライドと見栄を捨ててしまうのは意外であるが、おそらくその謎は、Sara の輝かしい将来が開けたことにあると思われる。病床に伏せている Simon を誘惑して、実質的恋仲になった Sara は、Simon から正式なプロポーズを受ける。大富豪であり、アメリカの貴族といつてよい名門の Harford 家の一員になることが決まったのも同然の愛娘 Sara によって、Melody のプライドは満足したからである。自分になりふり構わず守ってきたジェントルマンとしての Melody のプライドは、娘 Sara がアメリカのレディーになることによって、継続されることになるのであり、Melody が保とうと苦闘してきたジェントルマンとしての苦闘は報われたのだ。Melody は肩の荷をおろして、アイルランド系移民の何の気負いもない、さびれた酒場の平凡な親父に安住する日を迎えたのである。

ジェンダー

「性別 - sex」が「生物学的なものとみなされる男女の違い」を指すのに対して、「ジェンダー」は「社会的につくりだされた男女の違い」、あるいは「環境要因による性差」を意味する、と大まかながら定義できる。*A Touch of the Poet* の舞台設定がされている 1828 年当時、ジェンダーという考え方が定着していたとは思えないが、現代的視点からこの戯曲を分析するために、あえて「ジェンダー」という概念を用いることにする。ジェ

ンダーが「社会的につくりだされた男女の違い」を意味するのだとしたら、該当する男女の属している社会によって、ジェンダーの求める概念も、理想像も大きく異なるはずである。つまり、時代、地域、階級によって、ジェンダーは変化する、ということを意味する。

A Touch of the Poet は、時代、地域、階級の求めるジェンダーの要求に応じて、器用に自分を変えていけなかった男、Cornelius Melody、が巻き起こした悲喜劇だと解釈することができる。Melody は 18 世紀の後半に、成り上がり者のにわかジェントルマンの跡取り息子として、アイルランドのゴールウェイの城に生まれた。父は生まれながらの貴族ではなかったが、当時 Melody 家は土地の有力者であり、富も権力も持っていた。したがって、労働者階級の男性に要求されるジェンダーと、Melody 家の理想像とするジェントルマン的ジェンダーとの間には大きな隔たりがあったはずである。Melody が特別に働かず、毎日ただ酒を飲んで、社交にあけくれ、自分の容姿に気を配って、頻繁に鏡をのぞきこみ、Byron の詩を暗誦し、サラブレッドの馬を大切に育て、女性に言い寄り、名誉を傷つけられれば、位の高い軍人にふさわしく決闘を申し込む、という行動は、旧大陸の貴族あるいはジェントルマンの男性としてのジェンダーになかったものである。Melody が祖国アイルランドで、以前と同じく地主として生活していれば、なんら非難される生活スタイルではなく、Melody は奇人でも変人でもなかったであろう。しかし、Melody はイギリスで決闘をして貴族の男性を殺し、軍人としての職を追われたため、新大陸アメリカに移住せざるをえなくなった。地理不案内のうえに、知人もなく、習慣も違うアメリカで、Melody はかっこうのカモにされて、ただ同然の土地を売りつけられ、持っていた財産を失い、酒場の親父に成り下がってしまったのである。旧大陸にあってもジェントルマンは、もともと実態のない社会的身分であり、権力と資産の裏づけがあって初めてなりたっていた階級であるから、文無しになった Melody が意識改革なしに、物質的成功に重きを置く、新天地アメリカの労働者階級の男性用のジェンダーになじむはずが

なかった。Melody はアメリカでは、地主でもなく、権力者でもなく、資産家でもなくなっていたのだから、働いて妻子を養うべきだった。それが、Melody のような境遇の男性が果たすべきアメリカ男性としてのジェンダー・ロールであったはずなのに、Melody は過去の慣習から抜け出せるような柔軟な頭と感性を持っていなかった。その結果、Melody は働かず、妻子を女中として、ウェイトレスとして働かせ、自分は彼女らの労働の上にあぐらをかくことで生活をするという、当時のアメリカ男性のジェンダー・ロールから大幅に逸脱した、男らしくないとみられてもしかたがない生き方をしていた。その意味で Melody は「ジェントルマン」の礼儀正しく、他人の気持ちを思いやれる男性としての OED の定義 3 の「生まれながらの騎士道的精神とりっぱな感情を持つ男性」という意味において、ジェントルマンとみなされないばかりか、ジェンダー・ロールを果たさない、威張っているばかりの甲斐性のない男である。Melody の Nora に対する言動にいたっては、現代ならば離婚を請求されてもしかたがないようなドメスティック・バイオレンスの原動力だ、という社会的評価がなされる。移民第一世代に属する Melody は、心情的にはアメリカ人になりきったつもりで、アメリカのことを「この国、今では私の国になったこの国は、あのイギリスのやつらを地球の表面から追い出すのだ」(I.201) といきまわすが、Melody は伝統的イギリスのジェントルマンとしての価値観と生き方をきれいさっぱり捨て去って、アメリカの労働者階級のそれらに、自身を新たに適合させることはなかったのである。

しかし、アメリカで慣れない下積み生活を続けているうちに、Melody にもアメリカ男性的特質が宿りだしたとも確かである。それは「女嫌い(ミソジニー)」の傾向である。身からでたさびとはいえ、Melody の没落には、常に女性が関わっている。Melody が軍人としての名誉を失い、イギリスにいられない状態に陥ったのは、貴族の夫人に言い寄ったことから決闘になり、殺人を犯してしまったためである。また、Melody が「詩人氣質」を思う存分発揮して自由に生きていくことがむずかしくなった

のは、領地内の小作人の娘の美女 Nora に惚れて、同棲した結果、妊娠させてしまったので、身分違いの結婚を承諾せざるをえなかったためである。美男で身分の高い、主人筋の Melody に惚れこんでいた Nora は、美しい肉体と女の色香で、Melody を誘惑した。女の色仕掛けの罠にはまって、人生の自由とロマンを失ったことを恨みに思っている Melody は、酔うと Nora を呪う。Melody は女性の男性に対する愛を罠だと感じている。Melody は娘 Sara とヤンキーの御曹司 Simon との結婚を望んでいるのに、「あのかawaii そうな青年は、二人のしたたかな百姓女（ノラとサラ）に罠を仕掛けられて、逃げる隙がない。（中略）それに罠にはまらなかったとしても、つねに、最後の手というものがあるからな」（II.212）、「私はサイモンに対して、ジェントルマンとしての義務を感じるのだ。こんな結婚は、あの男にとって不釣り合いな悲劇だ。そういう結婚の悲劇を私はよく知っているから言うのだ。（中略）どんなにひいきめにみても、おまえをレディーだとまちがえることはない。私はおまえをレディーにしたてあげようとした。無駄な努力だった。誰も牝豚の耳を絹の財布に変えることはできないのだ。（中略）あの若いハーフォードは、自重しなければならない。彼が肉体的にうずくのはわかる。たしかにお前は美人だ。おまえの母親も昔は美しかった。だが結婚は別ものだ。おまえにとって理想の夫は、行いと性質からいって、うちのバーテンをやっているミッキー・マロイだ」（III.242-43）と自分の経験に基づいた、皮肉とも本音ともつかない悪態をつく。事実、Sara は母親を見習い、Simon を誘惑して、Deborah の結婚への牽制を退けるので、女の色香と肉体は社会的階段を上る際の有効な手段になる、という Melody の見方は正しい。Melody は、女を軽蔑し、嫌っている半面、レディー風の美女を見ると見境なく口説く癖は直らない。偵察にきた Deborah Harford を Simon の母だとは知らず、誘惑しようとして未遂に終わるが、Deborah の女性としての魅力を値踏みする Melody の目つきは、「競馬好きの人間がサラブレッドを見て喜ぶ、あの目つき」（II.216）である。Melody にとっては、サラブレッドの雌馬と

自分の周りの女性は同じレベルの比較の対象である。Sara から、サラブレッドをみせびらかすために乗り回して、他人の家の垣根を飛び越えて、牢屋に入れられそうになった時のことに触れられてかとなった Melody は、「あの馬は血統からすれば、ここいらのどんな女どもより由緒正しいのだ。たとえば、今日の朝、我が家を訪れたあの女（デボラ）と比べてもだ」（III.238）と弁護し、「おまえはどうしてあの雌馬にそんなにやきもちを焼くのか。あいつがきれいな足首と、すらりとした足を持っているから焼くのか。（中略）その無骨で、ごつい、醜い百姓女の手をテーブルからどけて、私から見えないようにしてくれないか、お願いだ。戻しそうなんだ。そんなものをサイモンに見せるんじゃないぞ」（III.238）と毒づく。Melody にとって、サラブレッドの雌馬が人間の女性とパラレルの存在であることは、雌馬が生きている間は妻 Nora に冷たかったのに、射殺して雌馬の存在が消えたとたんに、Nora に愛情を示して、キスをしたことからわかる。Melody の Nora への態度は、意を決して、愛妾と手を切った直後の男性が、罪滅ぼしに妻に孝行する姿を連想させる。英国軍の緋色の軍服を着てめかしこむと、いまだに驚くほどの美男であり、「女の弱みをこころえている」（II.229）“if I am any judge of feminine frailty”（II.229）Melody のレディー・キラーの腕前はここアメリカで発揮することは叶わず、アメリカでの愛人は、サラブレッドの雌馬だけにとどまったのである。

この戯曲でも O'Neill の女性に対するアンビヴァレントな視点は顕著である。Melody を支えるのは女性である反面、Melody を破滅に導くのも女性である。Melody の生活とプライドは、妻の Nora と娘の Sara の犠牲と献身によって支えられ、ジェントルマンとしての体面はその発音から母を連想させるサラブレッドの雌馬 mare (=la merè) (Manheim 107) に具現化されている。しかし、Melody のアイルランドでのジェントルマンとしての地位を剥奪するもとなったのは、美女のスペインの貴夫人であり、詩人として夢みる心を奪って現実に直面させるように仕向けたのも、Nora の肉体的誘惑の罠にはまったためである。Melody のジェントルマ

ンとしての最後のプライドを砕いたのは、最終的には Harford 家の使用人の暴言と暴力であるが、Melody のジェントルマンとしての没落の皮切りは、美女の Deborah Harford のあざけりと軽蔑に始まっている。このように、O'Neill 劇にとって、女性は、表向きは男性に仕え、従順に振舞っているが、その肉体的魅力で男性を罠にかけ、破滅させる魔女のような存在でもある。O'Neill の女たちは、男性を愛し、保護するようなふりをして、突然、男性を飲み込み、滅ぼしてしまう恐ろしい生き物でもある。ユング (Jung) のいう Good Mother と Terrible Mother の相反する二面性によって、女に慈しまれると同時に貶められている O'Neill 劇に典型的な男性像を Cornelius Melody にも見ることができる。

エスニシティー

アメリカがイギリスを負かすことを祈る Melody の言葉を受けて、貧農出身の妻の Nora が「アイルランド万歳！ アイルランドの解放を願って！」(I.201) と言うと、Melody は「(軽蔑するように) アイルランドだて！ アイルランドにとって、アイルランド人から解放されなきゃ、何の自由があるって言うんだ」(I.201) と皮肉たっぷりに、アイルランドの民衆への軽蔑を示している。同じアイルランド系のエスニシティーを持ちながら、Melody と貧農とを隔てているものは、過去における財力とジェントルマンであった階級だが、アメリカに移民した後の舞台が始まった時点で、一番顕著な区別の目印は、アイルランド訛り (brogue) の有無である。それゆえ、*A Touch of the Poet* において一番目立つエスニシティーはアイルランド訛りの英語 (brogue) である。John H. Raleigh は劇中、アイルランド訛りの英語と、標準的英語の2種類の言語が使い分けされていることに注目し、その意味づけを以下のように分析する。

A Touch of the Poet は、オニールの作品の中では、非常にアイルランド色の濃いものである。主要登場人物であるノラ、クリーガン、マロ

イ、ロッシュ、オダウド、ライリーがアイルランド訛りの英語を話している。最も複雑で、変化の激しい主役のサラとコンの二人は、アイルランド訛りを使うか使わないかが、それぞれの個性と関係の要になる。彼らからわかることは、アイルランド訛りは、アイルランドと貧農、過去、床で豚と共に転げ回る泥小屋、つまり、粗野で野蛮で卑俗であることを表す。アイルランド訛りでない英語は、文明化された、気位の高い、貴族的で優雅であることを表す。つまり、コンにとっては、アイルランドの地主であり、半島戦争を戦ったウェリントンの軍隊で少佐であった栄えある過去を示し、サラにとっては、サイモン・ハーフォードと結婚して、ニューイングランドの貴族的社会に入る抱負を意味する。その意味で、アイルランド訛りは現実を表している。それに対して、アイルランド訛りのない英語は幻想と夢を表す。しかし、そう言いきれほど単純でないことも事実である。なぜならば、コンの過去は輝かしいものであったが、サラの未来は貴族的なものになる可能性を秘めているからである。より正確に言うならば、アイルランド訛りとアイルランド訛りのない英語の対照は、コン・メロディーとその娘サラの移ろいやすい性格づけにあらわれているように、オニールのすべての劇に特徴的である過去と現在への執着のもう一つのドラマ化である。コンには未来はなく、二つの過去がある——一つは卑しい過去（アイルランド訛り）であり、もう一つは栄光の過去（アイルランド訛りでない英語）である。サラには未来（アイルランド訛りでない英語）とあいまいな現在と過去（アイルランド訛りとアイルランド訛りでない英語）が存在する。その意味で、この劇は誰がアイルランド訛りを使うか、使わないかを競っている、といえる。なぜならば、最初の3幕において、アイルランド訛りの使用は、サラの父に対する嘲り、つまり父が置かれている現実の環境と気がめいるような現在を父に思い知らせるための嘲りのためであり、また父がサラの中でもっとも嫌う要素、つまりサラの太いくるぶし、ずんぐりとした

鈍感な指といった肉体的特長に象徴されている彼女の貧農の要素、を父に思い知らせるためである。(中略)しかし、第4幕になると、サラは恋に落ちて、サイモン・ハーフォードを誘惑して、結婚することになる。それゆえ、サラの口からは、もうアイルランド訛りは出てこない。しかし、皮肉なことに、コンの魂はハーフォードの使用人の手にかかってうちのめされ、コンは「豚と一緒に床で育った、どん百姓の小屋からわきでできた盗人の安酒場の親父の、酔っ払いの、口ぎたなくののしる息子のように悪態をついた（ハーフォード夫人が窓から見て、嫌悪感からあざ笑っているのに）」のである。コンの少佐としての個性を表象していた愛馬である雌馬を射殺するという、象徴的な自殺を遂げた後、今になってもう一度、アイルランド訛りを話さない少佐であってほしいと願う、訛りを話さなくなった娘と、コンは最後の対決をする。今や、父と娘の最初の位置づけは、逆転し、メロディーのアイデンティティーは苦悶する。(Raleigh 222-24)

Raleigh が指摘するように、O'Neill はアイルランド系の人々のエスニシティーの一つといえる「アイルランド訛り (brogue)」を使って、登場人物の性格づけ、社会的地位の上昇と降下、それに伴う心理状態を巧みに表現している。「アイルランド訛り」を使うのは、当然アイルランド出身の人々である、Melody 家の人々、バーのバーテン、Melody の酒場に集まる Melody の元部下、それにただ飲みを期待するおべっか使いのアイルランド出身の貧農の人々である。「アイルランド訛り」を話す人中で、一番威張っているのは、ダブリンのトリニティ・カレッジで学んだ Melody 少佐であり、その次は退学したが、一時期、レディーの通う学校に通わされていた娘の Sara である。Melody と Sara は「アイルランド訛り」を話す場面もあるが、訛りのない標準英語を話すこともできる教養あるバイリンガルである。それに対して、妻の Nora はアイルランドの無学な貧農の娘なので、「アイルランド訛り」しか話すことができない。バー

の他の人々は当然 Nora と同じような出身なので、標準英語を話すことはない。それに対して、Melody の酒場の外にいるアメリカ的エリートであるヤンキーの Harford 家の人々は、標準英語しか話さない。言葉はエスニシティーのみでなく、階級、育ち、教養を表す場合があると考えられるから、O'Neill の「アイルランド訛り」の用い方は実際に即して、なおかつ観客にもわかりやすく、登場人物たちの置かれた社会的立場と特徴を表現する巧妙なテクニックである。

「アイルランド訛り - “brogue”」は、*Webster's Third New International Dictionary* によれば、もともとは「ブローグ靴」を意味する。「頑丈で、粗い作りの靴で、皮ひもで結ばれ、大まかな仕上げをほどこした、なめしていない皮を使った靴であり、以前はアイルランドとスコットランドの高地ではかかれていた」靴であったのが転じて、「方言、あるいは土地固有の発音、とりわけアイルランド訛り」を意味するようになった、という。

ジェントルマンを気取っていた Melody が、我にかえり、自分の現在のおちぶれた境遇を思い知った時に、忌み嫌っていた故郷の「アイルランド訛り」が突然口をついて出てきて、それまで身分の低い、無教養な輩だと軽蔑していた人々に合流して、酒を飲み交わす、ということから、O'Neill は「アイルランド訛り」に軽蔑すべき、下層階級の言語、という位置づけを与えていることがわかる。Melody はアイルランドでは、ジェントルマン階級だったかもしれないが、アメリカでは、本人の自負に反して、最終的にはジェントルマンとしての地位と評価は与えられず、無名の、貧乏なアイルランド移民の一人としかみなされていない、ということを象徴的に語っている。したがって、Simon を捕獲したことにより、階級上昇を狙える立場になった Sara は、「アイルランド訛り」を意識的に避けるようになる。イギリスに比べて、物質的豊かさが社会的評価に直結する傾向のあるアメリカでは、経済的に敗退したものは、負け犬であり、死んだのも同然なのである。アメリカの厳しい価値基準を思い知らされた Melody は、ジェントルマンだ、という彼にとって最後に残された幻想と

夢を奪いとられ、人格的な死を迎える。精神的死者になった Melody が帰っていくところは、故郷アイルランドの貧農が話していた brogue の世界しか残されていない。しかし、あきらめの境地にいたり、社会的に階級的に降下していった Melody には、奇妙なことに、今までには経験できなかった、不思議な平安とやさしさ、家庭の夫としての幸福が訪れるのである。祖国アイルランドにおいても、本国イギリスの支配の下でアイルランド系のジェントルマンとしての立場を維持するのに苦心し、立身出世を遂げるために、Melody は軍人として戦場に出るしかなかったのだろう。女性がらみの決闘スキャンダルで道をとどされた Melody は、自由と平等の国、アメリカ、に逃れてきたが、アイルランドの貧農出身のアイデンティティーは、アメリカでも変えることができなかった。しかし、アイルランドの先祖のルーツに戻った時に Melody が感じた、哀しいが、不思議なおだやかさは何なのだろう。

Melody は肩肘をはらず、ありのままの自分を受け入れたことにより、本来属すべき集団に合流して、心のやすらぎを得たのではないか。しかし、それは男としての敗北宣言でもあり、観客はほっとすると同時に一抹の寂しさを覚えるはずである。Melody を精神的死人としながらも、突き放さず、そっと遠くから包み込むように見守る生かし方に、O'Neill の、貧しいアイルランド移民に対するもどかしさ、批判精神とともに、たちきれない愛着を感じさせるエンディングである。

おわりに

A Touch of the Poet は、滑稽で哀しい劇である。祖国アイルランドで、ジェントルマン的生活をしていた男が、新大陸アメリカに渡って、財産を失い、社会的にはジェントルマンでなくなった後も、過去の栄光を保とうとする、その時代錯誤の錯覚による滑稽さを、O'Neill は辛らつに、ユーモラスに、そしてなによりも深い共感と愛情をこめて描いている。Cornelius Melody という男は、過去において「ジェントルマン」であっ

た、というプライドから逃れることができず、おちぶれた現在を受け入れることができない。貴族で詩人である Byron 卿の「チャイルド・ハロルド」を鏡の前で暗誦するのは、現実の自分が世の中に受け入れられないことに対して自己正当化を行い、ナルシスがその美しい姿を水面に映して自己陶醉していたような自惚れの儀式によって生きる力を奮い起こすためである。Melody は O'Neill のヒーローの特徴である「詩人の気質」を持つ、夢見る男であるために、現実逃避の生活を送る、甲斐性のない男だが、夢見る能力を奪われた時、その男の魂は死ぬしかない。O'Neill の戯曲には、結婚という制度の檻の中に入れられたことによって、物質的豊かさと生活能力を期待され、詩人の魂を奪われ、心身ともに枯渇して、死にいたる男性像がみられる。*Beyond the Horizon* (『地平の彼方』) の Robert がその典型である。夢と現実の葛藤、過去への過度の執着、が *A Touch of the Poet* においても他の作品と同様に見られる。Melody の現実不適應の主たる原因は、旧世界での過去の自分の社会的立場に執着して、新世界へ移住後の状況の変化に適應できないことにある。まわりの状況に合わせて、自分を器用に変形できず、現在の環境に適應できないために、過去の栄光や、現時点では幻想になるしかない過去の夢物語にしがみついて、色あせた現実の世界を直視しないことによって、かろうじて生命と自尊心を保っている。

しかし、過去の栄光であるジェントルマン的生活や戦場での手柄がどれほど Melody にとって有効なものであったのかは疑わしい。もし、旧世界と過去がそれほどすばらしいものであったならば、右も左もわからない新世界に逃げるようにして移民する必要は Melody になかったはずである。Melody の旧大陸イギリスに対する屈折した、アンビヴァレントな感情の一端は以下のせりふに明らかである。

Then you will see how quickly America will become rich and great!
(His expression changes to one of bitter hatred.) Great enough

to crush England in the next war between them, which I know is inevitable! Would I could live to celebrate that victory! If I have one regret for the past—and there are few things in it that do not call for bitter regret—it is that I shed my blood for a country that thanked me with disgrace. But I will be avenged. This country—my country, now—will drive the English from the face of the earth their shameless perfidy has dishonored!” (I. 201)

Melody の所属するアイルランドはイギリス本国の支配下にあった。Melody はジェンルマンの生活を送る城主であり、イギリス紳士だといっても、イギリス本国のジェントルマンとは、置かれた立場も本国に対して抱く感情も違うはずである。Laurin Porter はこの点について以下のように述べている。

劇の最後に、メロディーがアイルランドの貧農に変身するのは重要なことである。貧農と貴族という両極は、アイルランドとヤンキーの両極と同じように、この劇の論点が集中するところである。コンの歩んできた歴史は、貧農から貴族にのし上がろうとする、社会的階級上昇の努力を描いている。親のネッド・メロディーのジェントリー階級への立身出世は、もちろん最初から悪い運命をはらんでいた。なぜなら、それはエスタブリッシュな（階級の確立した）社会構造の外でおきた出来事だったからである。アイルランドは独自の貴族制度を持っていなかったため、メロディーは当時、揺らぎはじめていた英国本土の地主階級のステータスを模倣したのである。ジェントリー階級の誰もメロディーを相手にしなかったため、彼は息子のコンをダブリンにジェントルマンの息子と同格であることを示すために「大金を持たせて送りこんだ。しかし、コンは、ジェントルマンの息子たちは酒をおごってもらったり、借金をするのに、陰ではコンのことをジェントル

マンきどりの見栄っ張りだ、とあざ笑っていることに気づいた」(Poet 12)。

コンは最終的には、望みのステータスを得るために、本国のイギリス人の群れに加わる必要があった。英国軍の将校になった時に、コンはそのチャンスを手にした。(中略) それゆえ、父が獲得した富があるにもかかわらず、コンは社会的ステータスを得るために、それも外国でのみ通用する社会的ステータスを得るために、イギリス人と一緒になって、軍隊に入隊しなければならなかった。しかし、このステータスも続かず、コンは戦いの手柄にもかかわらず、最終的には不名誉な辞職を余儀なくされたのである。19世紀のアイルランドは、社会的流動性を許さない社会であったために、コンはアメリカ〔機会と無制限の自由の国であり、社会的階級のなさそうに見える国〕に行かざるをえなかった。(Porter 15-16)

Melody は旧大陸で拒絶されたばかりではなく、アメリカでも騙されて持参した財産をすべてかすめとられ、丸裸にされて落ちぶれているのだから、新世界においても同様に拒否された、と考えられる。したがって、Porter が述べるように「コンは最初に社会的上昇という流動性を認めない国によって、次に偽りの受け入れ体制を約束している社会によって、放り出されたのである」(17)。Doris V. Falk も、メロディーを「自分がどこに属しているかをはっきりさせることができなかった」(166) 男として位置づける。貧農出身の父をもつコンは、アイルランドでは貴族的な学友とその家族から歓迎されることはなく、自己の卑しい出身とジェントリーの気取りという両極端の間の葛藤に責めさいなまれていた、とみている (166)。

どこにも本当には受け入れられず、帰属するところを持たず、自尊心と幻想という夢のみが心の糧である Melody という「詩人の心」を持ったロマンチックな男は、O'Neill 劇に度々登場する「夢見る男」の典型である。*Long Day's Journey into Night* の「詩人の素質がある」“the makings of a

poet” (IV.812) Edmund は語る、「すべてのものが現実でないように見え、感じられた。何もあるがままではなかった。それが僕の望んでいたものだった——別の世界で、一人っきりになりたかったんだ。そこでは、真実が真実として存在せず、人生は姿を隠していられたんだ。(中略) まるで僕は霧の中の幽霊のようで、霧は海の幽霊のようだった。幽霊の中の幽霊でしかないものになれるくらい、穏やかな気持ちになれることはなかった。」(IV. 795-96)。Edmund のこの「詩人氣質」は Melody の最後のせりふと呼応する。ジェントルマンとしての誇りを捨て、アイルランド訛りを話す安酒場の親父に変身した Melody に向かって、娘の Sara は父のプライドをあざ笑った以前の自分の態度を詫びて、元の父に戻ってほしいと懇願するが、Melody は言う、「サラ！ 頼むからやめてくれ。俺をほっといてくれ」(IV.279)。

O'Neill は Melody を社会的には敗北者に降下させて劇を終わらせているが、Melody の存在そのものをあたたかく、同情をこめて、受け入れている。現実が目覚め、以前の自分の姿を「サーカスの道化」(IV.278) だったと自嘲し、妻 Nora に愛を告白し、生活苦と生活臭の漂う Nora の髪の毛にキスし、軽蔑していた酒場の仲間と一体になって陽気に飲み騒ぐ Melody の姿を、作者の O'Neill は、戦場で負傷した兵士をいたわるように、そっとやさしく包みこむような目でみている。Melody 少佐の人格的死を嘆く娘の Sara に向かって、妻 Nora は愛情をこめて言う、「私はあの人が好きなゲームは何でもするわ。あの人を愛しているからよ。今までずっとそうしてきたでしょ。(彼女は微笑む) そう、私にはプライドなんてないの。あの人を愛すること以外にはね」(IV.280)。

Sara の Melody への変わらぬ、深い愛と献身が、O'Neill の Melody への最終的評価である。物質的成功も得られず、社会的階級上昇に失敗して、ジェントルマンとしてのプライドも剥ぎ取られた Melody であるが、精一杯戦ってその魂を戦死させた、この誇り高い男 Melody 少佐に、O'Neill は限りない拍手を送っている。実人生では負け戦に終わっても、Cornelius

Melody は、パイロンのヒーローを、敗者の美学を、力の限り演じきって、自ら舞台の幕を引いたのである。

O'Neill は、過去と現在の境界線、幻想と現実の境界線、狂気と正気の境界線を危うくする「不気味なもの」になりかねない Melody の「ジェントルマンであった」、あるいは現在も「ジェントルマンである」という妄想と錯覚の反復する様を、コミカルにシニカルに、批判と共感のアンビヴァレンスの、崩れそうでいて容易に崩れない、絶妙な危ういバランスの中で、見事に描ききっている。アイルランド出身の Melody は、新大陸アメリカでは、「ジェントルマン幻想」に取りつかれた、生活能力のない「負け犬」であり、「過去をさ迷う亡霊」であるが、Melody の、厳しい現実の中で、一筋の夢にしがみついて生を継続しようとする葛藤の中に、O'Neill は価値を見出している。一歩まちがえれば「不気味なもの」になりかねない、ロマンチックにして滑稽な、愛おしくもあり、哀れでもある Melody の苦悩する姿に、O'Neill は観客の拍手喝采と共感を期待するのである。

Bibliography

Primary Source:

O'Neill, Eugene. *A Touch of the Poet. O'Neill: Complete Plays 1932-1943*. New York: The Library of America, 1988.

Secondary Sources:

Cain, Peter Joseph and Antony Gerald Hopkins. *British Imperialism: Innovation and Expansion 1688-1914*. London: Longman, 1993.

Falk, Doris V. *Eugene O'Neill and the Tragic Tension*. New Brunswick, New Jersey: Rutgers University Press, 1958.

Freud, Sigmund. "The Uncanny." *An Infantile Neurosis and Other Works*. Vol. XVII (1917-1919) of *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*. Trans. James Strachey. London: Vintage, 2001.

Manheim, Michael. *Eugene O'Neill's New Language of Kinship*. New York:

- Syracuse University Press, 1982.
- O'Neill, Eugene. *Long Day's Journey into Night. Complete Plays 1932-1943*. New York: The Library of America, 1988.
- The Oxford English Dictionary*. 2nd., ed. Oxford: Clarendon, 1989.
- Porter, Laurin. *The Banished Prince: Time, Memory, and Ritual in the Late Plays of Eugene O'Neill*. Ann Arbor: UMI Research Press, 1988.
- Raleigh, John Henry. *The Plays of Eugene O'Neill*. Carbondale: Southern Illinois University Press, 1965.
- Webster's Third New International Dictionary of the English Language unabridged*. Ed. Philip Babcock Gove. Springfield: Merriam-Webster. 1981.

日本語文献

- フロイト、シグムント「不気味なもの」、須藤訓任、藤野寛訳『フロイト全集』第17巻 岩波書店 2006年。
- 本論分の「不気味なもの」の邦訳はすべてこの版による。
- ケイン、P. J. & A. G. ホプキンズ『ジェントルマン資本主義の帝国Ⅰ——創生と膨張 1688-1914』竹内幸雄・秋田茂訳、名古屋大学出版会、1997年。
- 山本正「序章 いま、なぜ「ジェントルマンであること」か」『ジェントルマンであること——その変容とイギリス近代』刀水書房、2000年。

特にことわりのない本文中の和訳は拙訳である。

Synopsis

The Man Who Would Be Gentleman: “The uncanny” in *A Touch of the Poet*

Junko Shimizu

A Touch of the Poet is one of the striking tragicomedies of Eugene O'Neill. Through *A Touch of the Poet*, O'Neill proves that he can not only write good tragedy but also excellent drama, which comically tasteful.

The setting of *A Touch of the Poet* is from the morning till midnight of 27 July, 1828, in a forlorn tavern in the suburbs of Boston. Middle-aged Cornelius Melody is an immigrant from Ireland where he believes to have been a “gentleman”. Although Melody is now degraded to a drunken owner of the dirty, cheap tavern, and actually supported by his hardworking wife and daughter, he refuses to realize his true self and narcissistically praises his manly, handsome self-image reflected in the mirror. However, Melody’s illusion of “being a gentleman” is shattered by the severe antagonism of the rich Harfords, of which his beautiful daughter, Sara, is going to be a member. Sara falls in love with Simon Harford, who is an heir to the rich Harford family.

“The uncanny” in Melody is “the repetition of the same thing”, his recurrent illusion or self-deception of being a “gentleman”. “Being a gentleman” is not uncanny, but what is uncanny is the difference between his present state as a shabby drunkard and his illusory past as a glorious,

gallant gentleman. What is uncanny is Melody's obsession with the past and his present state of being obsessed by the illusion of "being a gentleman".

When the symbol of Melody's glorious past and male vanity, the beautiful English military uniform, is torn by Harford's subordinate men, Melody ultimately realizes that he was possessed of the past glory, void pride and illusion. Melody painfully learns that even in the U.S.A., a man without money or social status is not respected as a "gentleman". Deprived of all his pride, Melody is forced to recognize his poor social and financial status; however, instead of abandoning his aristocratic bravado, Melody is freed from the affectation of aristocracy and heroism and reveals his true self, that is, his easy bum nature. Despite Melody's sudden transformation in character, his faithful wife, Nora, proudly says, "I'll play any game he likes and give him love in it. Haven't I always? (She smiles.) Sure, I have no pride at all—except that". Eugene O'Neill depicts the foolishly old-fashioned dreamer, Cornelius Melody, with irony, humor and pathos.